

胃瘻造設の代理意思決定をする家族の想いとその変容
- 患者の介護に対する代理意思決定者の関与に着目して -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
大谷 風沙

本研究は、意思決定が困難な本人に代わり、胃瘻造設または不選択の決定を下す、家族の想いとその変容を明らかにすることを目的として行った。その際、代理意思決定者による患者の介護への関与が、意思決定や造設その後どう影響しているかということに着目した。意思決定が困難な本人に代わって、胃瘻造設または造設を選択しなかったという決定をした経験のある3家族を対象に、半構造化インタビューを行い、質的に分析を行った。さらに、調査協力者は、患者本人が既に亡くなっている家族を選定した。

その結果、3家族の事例から、家族の心理的プロセスとその想いの変容や、代理意思決定者には、本人が亡くなった後も代理意思決定と介護についての悩み・葛藤が存在し続けていることが明らかになった。

さらに、この3家族の事例の比較から、胃瘻造設の代理意思決定に関する家族の想いやその後の気持ちの変容に関して、どのようなことが考えられるかということ、互いの共通点や相違点、特徴について触れながら、考察した。